
神になった転生者

困舎刀風旗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神になつた転生者

【Nコード】

N3092Z

【作者名】

困舎刀風旗

【あらすじ】

色々あって、高校生が転生することに。

転生先はテンプレ通りの剣と魔法の世界。少々おかしな、神になつた少年がテキストに暮らしていくものです。

「そう、つまりテキストにランクが高い魔獣とかを倒したり、学園で勉強したりする物語なのだよ。いやはや、つまらなそうだ」

処女作です。作者は未熟者です。そのため表現とかその他いろいろが全然ダメです。でも、楽しんでもらえると思います。

初話・ふむふむ、記憶にないな（前書き）

どうも、はじめまして。

処女作です。そのため、表現とかその他いろいろが全然ダメです。覚悟しといてください！

初話：ふむふむ、記憶にないな

「おーい。起きてる？大丈夫？」

目をあけると、そこには神がいた。

いやいや、嘘じゃあないよ。

何故かは分からないけれども、わかった。なんだろう……、神のオ
ーラみたいなものが感じられたからだ。

でも、それがあまり感じられない。それに、姿が女ということもあ
つて、あまり神らしくない。ちなみに、その女は黒髪黒目の純和風
美人。さらに、巫女服。

「か、神っていうとキリストやゼウスのようなオジサンとかだと
思っていたのに……。」

「あのさ、あたしを、あんな大物と比べないでくれる？」

それ、に、失礼だよ、おじさんなんて言うのは「

目の前にいる女が話しかけてきた、それよりも！

「何故わかった！？おれが考えていることを！」

「いやあ、此処はあたしが管理している空間だから、物事は常に、
あたしの思うがままなのよ。だから、常に現象はあたしに、現象を
起こしていいか？と聞いてきていて、それは、観測してるのと同じ
ようなものなのよ。」

それに、今のあなたの肉体はあたしが作ったものだから、わかるの
よ。

あたしはこれでも、神の端くれだからね「

つまり態々喋るといふ行為をしなくてもいいということか。これは、
楽だな。

ん？でもまあよ、神という割には全然神らしくないのだけれど……。

「まあ、あたしは神って言っても、人から神になったからね、……

…人らしさが残っているのよ。と、いつても一千年前ぐらいになっ
たんだけど……。」

「千年前だと！？おば「？なんか言おうとした？」

「いえいえ、何でもないですよ」

足が砂になっていった……。怖くないもん。がたがた、ぶるぶる。

今度は手……………

……………

危ない、危うく考えそうに……………ってこういうのもダメなんじゃない！

なんてことだ！精神の自由はないのか！？

「だって日本じゃないし、ここ。それに言い訳するようだけど、一千年って神の中じゃあ若い方なのよ。」

ふうん。というより今さら気がついたけど、やっぱり人から神になれるんだ。オレもなってみたかったなあ。

「いやいや、君は何を仰っているのかな？」
「は？」

「あんたはもう神になっているよ。」

へ？何言ってるんだ？こいつ？馬鹿か？

「おいこら殺すぞ？あああん？」

「と言いたいところな

んだけど、」

『と、言いたいところ』なら頭だけ残して全部消す必要はないんじゃないのか？

「やっぱり、憶えてないのか。じゃあ、簡単に説明するよ。」

まず、あんたの学校にテロリストが来て、
華麗に無視して話を始める神様。

「そんで、あんたの学校にいる首相とかをはじめとする政治会の人や、経済界の人の子供を人質に取ろうとしたのよ」

ふーむ。まったくもって思い出せない。というよりオレの学校にそんな大物の人達って居たっけ？

「いたわよ」。まあ、そういう情報は隠されていたけれど……………。

まあ、それで、クラス単位で制圧しようとしたんだけども……、あんたのクラスにやってきた人に対して何をとち狂ったか、あんたがそれに反抗してテロリストの動きを封じたのよ。

まあ、ただ一人しか拘束できなくて、すきを見てロリストが、M92でドーン。で、あんたを殺した。」

おいおい、神になってねーじゃあねーか……。
というより、オレ何やってんだよ……………。

「っーか、なんでベレッタM92を知ってんだよ!？」

「そんなことはどーでもいいじゃない。」

それよりも、神になるのには死ぬことが絶対条件なんだよ。ほら、キリストだって死んで生き返ったでしょ？それと同じような事よ」「
そうか？

「そうよ。それで、あんたは死んで生き返って、覚醒。神になったのよ。それで、あなたは逆襲をして、テロリストを全員捕まえた。」

「ただ、その能力に恐れをなした神々はあなたをこの神が生まれる世界 ちから 原初世界 から、他の世界にあなたを移すことにしたのよ。」

「うわあ。神に恐れられるなんてすごいなあ、オレ。」

「なあに他人事みたいに言ってるのよ。あなたのことでしょうが。」

で、あたしは、怒りを買って自分達が殺されかねないからって、他の神に押し付けられてあんたに ああ、神になってるあんたね

「念話ってわかる？テレパシーとかのことね。それであんたに話しかけて、その……………テロリストと言えいいのかしら？を倒してもらったの。」

「で、その報酬で、異世界に転生させてあげますよってことにしたのよ」

なるほど、それでここにいるのか。うん、まったくもって、何も思
い出さないなあ。」

まあ、いつか。神になったから転生して、剣と魔法の世界に行くことになったんだし。死んだのはどうでもいいか。いやはやっしかし、

「しっかし、あんたも大変だなあ。下っぱだから、もし何かが起こってもいいように使われたわけか。と、いうか俺にそんなこと言っつてよかつたのか？」

そついうと驚いたような顔をした。

「ええ、いいのよ。そして、よくわかつたわね、それ。

でも、いろいろと力をもらつて神格が上がつたからいいんだけどね。いいのよ。はあ。

「で、あんたはどこに行きたい？」

うん？IF。

「何よそのIFつて……………」。

で、言葉が足りなかつたわね。どんな世界に生きたいの？つてこと。ふふふ、まさか神にさえ分からないとは思わなんだぞ！！IFとは

「い・い・か・ら……………答えなさい」

「はっ！はいっ！」

い、言えない。何があつたかは言えない。察してくれ。

「もう一度？」

うん、早く答えるからやめてください。つてゆうか何でおれに神の力がないんだよ！

「それは、封印してるからよ」

なんだよ、それ……。せつかく神になつたのに！まあ、仕方ないか。神に恐れられるぐらいの力だつたんだし……………。

「で、どこに行きたいの？」

「えつと、特にな

「もう一度言ってみなさい」

「えっとですね、まあオーソドックスに剣と魔法の世界に生きたいなあ〜なんて」

なにもなかったよ。

うん。空白あるけど何もなかったよ。

「それだけ？それだけだと沢山あるんだけど。じゃあ、こっちで勝手に決めるわよ。それでいいわね？」

「OK」

「さて、次にやることは……… ああ、そうだったわね」

なんか紙みたいのを空中から出現させて、見る神。いや女神か？

「なるほど、じゃあそうしましょうか」

と独り言。

なんだ？

「え〜っと、あなたの深層意識からあなたが欲している能力がわかったから、もう終わりね」

どういうことだ？

「つまり、お別れの時間が来たということよ」

だから、どういう意味だ？

「もう、必要なことが一応終わったから一時期の間さよならってこと」

ふうん、そうなんだ。

で、おれのチートかどうかは分からないけれど、能力って何だ？

「それぐらいの時間に時間使うのはかまわないか。

えっと、

剣と魔法の才能

前世の記憶+色々な情報

忘れようとしれない限り、忘れないでいられる記憶

まあ、そんなところね。

あ、でも、正直言つとこれだけだと足りないのよね〜、全部最高レ

ベルにしても。

だから、転生して新しく何か欲しくなったら、言ってね。たいてい夢に出てくるから」

「OK。わかった」

「じゃあ、いつてらっしやい〜」

ふむ、まったくもって楽しみだな、異世界。

視界がだんだんと黒くなりオレは意識をなくした。

初話：ふむふむ、記憶にないな（後書き）

ちなみにEFは意味不明を略したイミフの略です。
表現がダメですみません。

できれば、アドバイスをください。また、誤字脱字があれば、報告
してもらえると嬉しいです。

二話・いやはや、じわっ

オレが転生して三年が過ぎた。

最初の頃はあまり意識がなく、元の世界の赤ん坊と同じように泣きわめいていたが、1年ぐらい経つと意識がしつかりしてきて、自分が思うように体を動かすことができるようになった。

この世界の人は元の世界と比べ成長速度が速い。そのため、オレは1才半ぐらいでしつかりと話せるようになった。まあ、意識がしつかりしてきたというのもあるんだが……。

ちなみに言語は日本語。だが、文字は平仮名のような見たことのない文字だった。

そのため、オレはまず文字の読み書きをできるようにした。漢字のようなものとかがなく、平仮名のようなものだけだったため、比較的簡単に覚えることができた。

その後は、家に居る時は家にある本などを讀んだりしていた。

ちなみにオレがこんなに自由に行動できたのは、両親から嫌われているとか、ほつとかれてるわけではない。むしろ好意的すぎて困っている。

俺の両親は、二人とも冒険者なのだ。しかも、上から二つ目のSSダブルエスランクの。

そのため、強制依頼を受けて、やらなくてはいけないことがある。さすがに、俺が生まれてから一年半ぐらいは、強制なのに行かなかったが。

そ・れ・で・だ。大抵は一緒に連れていってもらって、母さんに実物を見ながら、野草のことを色々教えてもらったり、父さんに魔獣のことを教えてもらっていたりした。

その旅の途中のことだった。というより昨日のことなんだけど！

誘拐されちゃった

えへっ。

うん、精神年齢が既に20近くなっている身としては、気持ち悪い。なんでこんなこと言ったんだろ？……。……。……。

さてと、どうということかというところ、普段住んでいる国、永久中立王国イクオルリーを出て、マグルナルス共和国のある町についた。そして、母さんにお使いを頼まれて一人で街の特産品だというものを買いに行った。

そのときに、人ごみに紛れて首の後ろから一発どん！となにかで叩かれた。

その時に思ったのが、

人って首を後ろから思いつき叩かれると気絶するのは、本当のことなんだということだった。

さて、気づいた

「おい、ガキが起きたぞ！」

まったく、読者に申し訳ないとは思わんのか！まだ説明しきれていないだろ！

気づいたらどこかの部屋にいた。オプションとして、猿轡と手首足首を縄で縛られて。俺は縛られて興奮する奴じゃあないのに……。

と、そんなことを考えていたら、いかにも、荒くれ者です！下衆です！と言えるような格好をした人達が俺の前にやって来た。

「おい、お前。命が惜しいなら黙って俺たちの言うことを聞いているんだ。そうすりゃあ、きちんと帰れるからよお。まああ、その時

はお前らは全く金を持ってないだろうがなあ。「」「ぎゃハハハハハハ」「」

最後は全員できれいに、汚く笑う、下衆。

「おっと、両親とかが助けしてくれると思わないほうがいいぞ。いくら高ランクのやつだろうが、人質がいる限りはただの人間だからな」

どうやら、オレの両親が高ランクの冒険者だと知ってのことらしい。多分、街に入って宿屋へ向かったときに一緒にいたのを見られて、こんなことをしたんだろうなあ。

はあ、馬鹿だな。まったくもって、哀れみしか感じないよ。

オレは確かに手足も封じられてるし、口も封じられてる。いくら神様からいろんなものをもらってもこの状況じゃあなにもできないと思う。というより、オレはまだ習っただけで、何もできないんだけぞ。

でも、ねえ〜。

オレの両親は伝説のSSランクだぞ？しかも、オレはその両親の一人息子だぞ？

ああ、可哀想に……。多分死んだほうがマシなことが起きるんだろうなあ。と、いうより以前似たようなことがあって、地獄を見た。だから俺は忠告してやった。

「ウバブヴ（今すぐ）、ボエゴババジダボブバビボ（オレを離したほうがいいぞ）」

しまった！猿轡されてるんだった！

「おい、何か言ってるぞ。黙らせるか」

そう言っただけを真正面から殴る可哀想な人たち。まだ体が弱いオレはそれで気を失った。

あーあ。オレに傷を付けちゃって。本当にどうなるんだろうなあ。

気づいたら母さんの顔があった。

「ああ、ルシア！！やっと気づいたのね！！ほんとどうに心配したんだから！！」

そう言っただけを抱きしめ……………いき……………が……………
そして、オレは気を失わなかった。

危ない母さんがあと0.1秒抱きついていたら死ぬところだった……。

転生したあと母親によって殺されるってどんな存在だよ！

あ、遅くなったけどルシアってオレのことね。コルクルシア・ニールで、ルシア。

「ああ、ごめんね苦しかった？でもね、でもね。ルシアが無事だった分かって居ても経ってもいらなかったの」

ははは、母さんよ。だからって、持つ息子を殺しそうになるのはいかなものか。

しかし、今オレがいるのはまだ下衆に連れてこられた場所のようだ。どうしてわかるかというと、下に下衆1号の頭が見えるからだ。後ろからだから、顔に何かされたのどろろか分からない。というか知りたくない。こ、怖すぎる。

「あ、ルシア、こんな汚いものなんか見なくていいからね」
そうして、オレを抱き上げ視線を顔に固定する。

「あれ、疲れちゃったのかな？顔が青いわよ」
そういうわけじゃあないんだけど。

「じゃあ、おやすみ。彼の者を眠りへと誘え 睡眠術」

そうして、オレは強制的に眠らされ、今日に至る。起きると父さんに話しかけられた。

「おはよう、ルシア。昨日は災難だったな。いや、というよりすまん。いくらお前が他の子と比べしっかりとっているとはいえ、まだお前は三才なんだよな。しっかりとすべきだった」

「ううん、僕のせいで余計なことさせちゃったんだから……」

どうやら、今オレは宿屋の部屋にいて、母さんは外に今回のことを報告しに行ったそうだ。

そうだ！この機会に色々と戦闘技術を教えてもらうか。

「おとうさん！僕わかってるんだよ！だって、もし僕が捕まらなかったら何も起きなかつたんだよね！？」

「いや、そういうわけじゃあないんだが……」

「でも、でも、お父さんたちに迷惑をかけなかつたんだよね？」

「迷惑だなんて「だから、教えて！また、あんなことが無いように僕、頑張るから！」

ふふふふ、必殺幼児の可愛い泣き頼み！これに、断れる奴はいまい。

「仕方ない、お前がそこまで言うのなら母さんと相談して、剣の使い方とか魔法の使い方とか教えるかどうか決めるからな。今までいろいろと教えていたが、もしやることになったらただ覚えるだけ

じゃあないから難しいぞ！それでも、いいんだな？」

「うん！」

「わかった。言っとくが、俺の訓練は厳しいからな。とりあえず、母さんに会いに行くからここで待ってるよ」

「うん、わかった」

こうしてオレは、親からさらに色々なことを学ぶこととなった。

だから、その礎になった下衆共には感謝している。
そして、改めて思った。

両親が強すぎて怖い。

「話・いやはや、こわっ」(後書き)

の中が魔法名です。

アドバイス、感想をくださるとありがたいです。
誤字脱字があれば報告してください。

三話：いや〜説明が多過ぎるな〜。それに（以下略）前書き（

題名通りです。

変なところがあるかもしれない。

そのため後で変えるかもしれない。

また、お気に入り登録してくれた方ありがとうございます。

三話：いや〜説明が多過ぎるな。それに（以下略

オレが両親から魔法とか戦闘技術とかを習い始めて、2年が経った。つまり、生まれてから5年ほど経ったということだ。

オレは、神様から剣と魔法の才能をもらっていたためか、両親が驚くほどすごい勢いで技術などを習得していった。

例えば、今のオレはたいていの武器ならある程度使える。と、いつでもオレの背丈と筋力にあったものでないと使えないが……。というより、これ、剣の才能というよりすべての武器に対する才能なんじゃないかと思っただが、どうやらこれは、父親の血か、転生したことの影響だと思われる。なぜなら、

適正な剣ならば、俺の技術は一流とまではいかないが、一流の少し下あたりだということらしい。五才で、だ。

うん、こわいな。もしオレが他人で、五才にして一流に近い剣の技術を持ってたら怖がるよ。うん。

魔法についてはいろいろ面倒だから、また後で。

それで、だ。

色々と母さんと父さんに習いながら過ごしていたある日のことだった。

いつものように体力づくりの一環として行なっている家の外周周りを終え、家に帰って来た。

と、玄関に誰か知らない人がいた。どうやら、父さんたちと何か話しているっぽい。なんだか内緒話ほかったので、隠れて耳を澄まして聞いてみると、

「お願いしますー！我々も、中立であるということをごねじ曲げることがなかったのです。

それに……。いえ、何でもありません……。とにかくお願いしますー！！もしダメでしたらこちらとしても強硬手段を取るしかなくなっています」

ふむ、どうやら知らない人は永久中立王国イコールリーの役人さんのようだ。

なぜ分かるかというのと、中立である、と言っていたからだ。この中立というのには長い歴史がある。

そもそも、今オレ達が暮らしている世界“アスガルズ”にもともと人間はいなかった。この人間というのは人の形をした種族という意味で、エルフやドワーフなども含む。ところがあるとき、理由等は定かではないが異世界の人々がやって来た。

その集団のリーダー格の人は、自分たちと同等近くの知能を持っている者はいないと思っていたそうなのだが、実際にはいて、どうしようかと迷ったそうだ。

ある者は、魔物だといひ排斥を進言し、ある者は、同等の知能を持つているなら仲良くやろうといった。

結果、そのリーダー格の人が出した結論は、中立という選択だった。そうして、排斥を唱えるものは去ったが、その後そのリーダー格の人を王とした国、永久中立王国イコールリーができたのだった。

ちなみに余談だが、排斥唱えた人たちはゴオルランド帝国を作り上げたとのこと。

そうして、今も中立を守って来ていると思われていたが、実際はそうではないらしい。

まったく、何によっておびやかされているのかは知らないが、オレの父さんとかを巻き込まないでくれよ。と、長いこと回想にふけていた所為で、話は終わっていたらしい。いつの間にか居なくなっていた。

玄関に行くとき父さん達が待っていた。

「ルシア、突然だが、父さんたちは、鬼ヶ島に行かなくてはならなくなつた。今回はお前を連れていけそうにもない。だから、ジンのところに行つてくれないか？」

「えっ！」

はっ？なして？どゆこと？

「お、お父さん。ど、どうして行くの？前は鬼ヶ島にはいかないって言っていたよね？」

「実はだな、色々あってな、行かないといけなくなった。今回は、各国の軍がでてさらに冒険者も募るそうだ。だから、お前を連れていけそうにもないんだ。すまん」

「どうして？父さんだってすごいって言ってたよ。僕も一緒に行つて戦つよ」

「そういうわけじゃないのよ。いくらルシアがすごくても他の人が認めるとは限らないのよ。そして、その人たちがあなたに何かするかもしれないでしょ。私たちはそれを心配しているのよ」

「そうなのか……。いやはや、そこまで考えてくれたとは……。まあ、普通五才にすごい力があるとは思わないよなあ。」

「そ、それに、もしオレになんかあったら……。うん、地獄になるねブルブル。仕方ない。」

「わかったよ。ジンさんの所ってことは、久しぶりにリヴに会えるんだよね？楽しみだなあ」

「そう言つて納得をしているようにして、とりあえずオレは家に入つた。」

今現在この世界に唯一見つかつていて、オレ達が住んでいる大陸、グレブリフス大陸には唯一魔物が収める国がある。

その国は、オレが生まれて1年ぐらいたったときにできた。

当時あった小国を鬼たちが襲い、自分たちの国と宣言したのだ。そ

のときに、周りにある国に

自分たちで暮らしていくため手出しは無用。

こちらからも何もしない

と使者を送ったとのことだ。

しかし、周りにある国はその使者（もちろんその使者は鬼だ）を殺し、逆に攻めたそうだ。

だが、結果は惨敗。今まで、統率などされることがないと思われていた鬼たちが、見事に統率され、まるで人のように戦ったという。

その戦で、多大な損害をした国はそれ以降攻めなかったが、今回冒険者などすら動員して確実に滅ぼすみたいだ。

ちなみに、鬼というのは、ゴブリン種、オーク種、オーガ種のことだ。通常はゴブリンたちは魔物として扱われる。しかし、知能が人並に高いものは魔物排斥主義の国以外では魔族と呼ばれて、人と同じように扱われる。今回の場合は、鬼たちのリーダーである、鬼皇^{オウガロ}帝は魔族として扱われるのだが、他のゴブリンとかが同じように扱われない。

しかし、オレとしては、10年に1体しか現れないという、王種を見たかったのになあ。あ、王種というのは読んで字のごとく、その種族の王となるべく生まれたものだ。

思考は人並み（この場合は褒め言葉）。身体能力も同種と比べると数段上。それに、同種、下位種族に対する絶対的なカリスマがある。もし、絶対的なカリスマがなければ、鬼ヶ島は出来なかっただろう。さて、父さんから鬼ヶ島に行くという話を聞いた日は既に過ぎ、その日から3日後、オレは、庭にある森に来ていた。

何故来たかというと、ここに転移門があるからだ。転移門というのは、行ったことがある場所で、そこに転移門があれば転移ができる門のことだ。複数人が同時に移動することもできる。ほぼどこにも作ることができるが、管理するのが大変なことから作るのには1流の技術がいるため、あまり作られていない。

だが、母さんという魔法に関して右に出るものがないと言われ

ている人がいるため、庭に設置されてある。

オレは、まだジンさんたちが住んでいるヤーライの森に行った事がないため、父さんと母さんが一緒についてきてくれる。

「ルシア、あつちでも鍛錬は忘れずに続けるのよ？たしか、ジンにはあなたより2つ年上の息子がいたはずだから、その子と一緒にするのがいいかもね」

「うん、わかったよ、お母さん」

「あ、あとそうね。あつちで、新しい大系のことも教えてもらうのもいいわね。私は行ったら、まずリヴ成分を吸収しようかしら」

お母さん、そんな成分は人には存在しないぞ。とはいえ、口には出さない。いや、出せない。いくらオレだからといって、オレより愛されているリヴのことに口を出したら……、ね。わかるよね？

「それじゃあ、いくぞ、ルシア。転移、ジンの家」

おいおい、父さん。そんな単語で行き先を設定してあるのかよ。

いやはや、そこはなんかいい感じには出来なかったのか？

まあ、いい。

さて、着いたら久しぶりにリヴに会えるんだ。

まったくもって楽しみだ。

三話・いや〜説明が多過ぎるな。それに（以下略）後書き（

変なところとかアドバイスとか感想とかをくれるとありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3092z/>

神になった転生者

2011年12月18日00時50分発行